

勝谷誠彦の××な日々。 [deliver@katsuyamasahiko.jp]

2010年1月24日号(抜粋)

小沢一郎民主党幹事長としては囲碁で言うならば先手で一石を打ったところだろう。それに対して、検察側が次はどう打って来るかが問われる。

<小沢氏会見、疑惑関与を全否定／「幹事長職を全う」>

<http://www.asahi.com/national/update/0123/TKY201001230268.html>

今日の大マスコミからは「説明責任」という言葉が激減した。そのために小沢さんは予定になかった記者会見をしたのだ。しかし、明日からまた大マスコミは「説明責任」をいい始めるだろう。私が「説明責任」という言葉が嫌いなのはそこに「どこまで」という概念がないからだ。素っ裸になって「見て下さい」といって、大マスコミや検察が頭の中で思い描いているものがなければ「じゃあ腹を裂いて見せろ」と言っているようなものなのである。腹を裂いて見せて本人が亡くなって、それでも何も見つからなければ、無責任な糾弾者は「あ、なかったわ」といって次の犠牲者を探しに行くのだろう。

政権与党の幹事長を検察はその場で被疑者に仕立て上げて聴取した。法的にはその方が白黒が明らかになりやすいというともあるが、その手法は、これまでの検察のやり口と同様、あまりに邪道だ。

あまりにいいタイミングで告発をした<市民団体>の存在は偶然なのかどうなのか。これはいい前例だ。これからも怪しいと思う相手がいれば私たちはどんどん「告発」をすればいい。検察はそのたびに被疑者として事情を聞いてくれるそうなのだから(嘲)。

煽りに煽ってきた大マスコミは、小沢さんが出てきてしまったものだから、今度はどう因縁をつけようか困っている。先日来目立つのは、写真を使って悪いイメージを作り上げる手法だ。産経新聞がカメラの三脚の間から小沢さんを撮ってるで格子の中に閉じ込められているような写真を掲載して煽惑を買ったが、今日の朝日新聞のこれらの写真も相当にあざとい。

<「検察、公平公正な捜査を」小沢氏の一問一答>

<http://www.asahi.com/national/update/0124/TKY201001230375.html>

あるいは、最近流行っているのは小沢さんが歩いているところをいくらでも撮れるにもかかわらず、わざと車の中に座っているところを大型ストロボのぶっつけで撮る手法だ。「護送」や「送検」の犯人のイメージを重ねさせようとしているのである。

私が現場の記者たちに「いいかげんにしろよ。恥を知れ」というとみんな頭をかく。それでもやるというのは集団心理なのか、誰か指示している人間がいるのか。

頭のない化け物が暴走しているようなことが、この国では最近多すぎる。

2010年1月23日号(抜粋)

いよいよ今日、小沢一郎民主党幹事長に対する任意での事情聴取が行われる。

<4億円どこから？／小沢氏の関与は？／検察聴取の焦点>

http://www.asahi.com/special/ozawa_sikin/TKY201001220478.html

(中略)

昨日私は、絶対的な強者である検察が被疑者を取り調べるにあたっては法的能力では拮抗する力を持つ弁護士が、被疑者(小沢さんは形式的には被疑者ではないが、検察的にはそう決めつけている)と同席しなくてはフェアではないと書いた。今回、そのところでギリギリのせめぎ合いが行われているようで、実際の事情聴取の部屋よりも、その「組み手」の段階こそが闘争であると思われる。どうやら弁護士は同席は認められなかったが別室に待機し、いざとなれば小沢さんは相談にそこに行く、ということになったらしい。まるで法廷劇を見るような緊迫感がそこにはある。

大マスコミが伝えるべきはこういう手続きや手順がきちんと行われているかどうかということなのだが、それをやると検察の虎の尾を踏むからどこもやらないのだ。

その検察の狗となっている大マスコミだがここへきて色分けがはっきりしてきてまことに面白い。

反検察の反旗を翻しているのはなんと『週刊朝日』『日刊ゲンダイ』そして東京新聞の一部である。ほとんどの大マスコミが走狗と化していることはご存じの通りだが、まことに情けないことに今までならば、もっと知的に高い立場からそうした付和雷同馬鹿を冷笑し続けてきた『週刊文春』『週刊新潮』が今回はむしろ尻馬に乗っている。

(中略)

そんな中でしかし『新潮』はやはりチクリとあちこちに棘を仕込んでいいる。このあたりが新潮社が生き残ってきた鶴のような凄味であって、一筋縄ではいかないところだ。

東京地検の佐久間達哉特捜部長の「正体」を暴いたのである。それもグラビアの方に本当にヤバい部分を書いているところがいかにも『新潮』だ。

<検事になってからは法務省経験も長く、手掛けた仕事の中でも強い印象を持つのが「人権擁護法案」の立案。人権擁護曲調査救済課長時代は「朝まで生テレビ」にも出演していた。>

あの天下の悪法、人権擁護法案を作った張本人ですよ。外国人参政権のことなどで小沢憎しと言っている方々は、ありがとさん、人権擁護法案の推進者の背中を押してくれているのである。ここで佐久間さんが勝利するとしばらくは日本の司法は彼に何も言えなくなる。と同時にそれは今の政権の崩壊を意味するから、次の政権は佐久間さんに媚びる可能性が極めて高い。私たちの世の中には、外国人の参政権どころかもっとはるかに、支那人朝鮮人やエセ同和人権屋などが、権力の手先となって跳梁跋扈することになるだろう。

『新潮』は特集の中でその佐久間さんの言葉として「殺さなくては殺される」というものを紹介

している。こういう言葉こそ意図的リークではない手触りだ。官僚としての自分の生き残りを賭けて佐久間さんが勝負に出たというもので、じゃあ上層部はどうしているのかという、まあ話半分だが、であればそんな男の走狗をつとめている大マスコミはいったい何なのだとということになる。ところが『新潮』はそこには踏み込まない。『新潮』『文春』のトホホぶりの裏に何があるのか、DNAだけでは説明できない不思議だ。大マスコミの劣化が、結局は大マスコミの記者からの二次リークに頼っていた週刊誌をもダメにしているのだろうか。

(中略)

『週刊朝日』はオムニバス形式ではなく特集一本で勝負している。上杉隆さんの「検察の狂気」だ。上杉さんはもともと記者クラブは親の敵の人だ。そのことを割り引いてもここに書かれている内容は背筋が寒くなるようなものである。もちろん私はかねて知っていたことだが、垂れ流される大マスコミの情報を読み解くためにも、ぜひとも今出ている『週刊朝日』は読んでおいた方がいい。繰り返すが、検察と大マスコミとの関係についてはすべて本当です。同誌が出てから私は大勢の大マスコミの友人に当てたが、誰もが嫌な顔をしながら「その通りだよ」と言った。

ひとつだけ紹介しておこう。いわゆる「ガサ入れ」の映像がなぜあんなに整然と撮られているのか。警察の送検などの絵はいつもカメラがブレている。しかし検察関係者が捜査先に入る絵はまことにきれいだ。もちろんあれは事前にガサ入れの場所を耳打ちされているからカメラが準備できているのだ。しかも曲がり角を撮る。そこを曲がっていく関係者がもっともカッコよく映るからである。そういう目で映像を見て下さい。笑えてくるから。頭はいいけど世間的には馬鹿(笑)が検察官をやっているのがよくわかる。

ガサ入れ先が事前に漏れているわけですよ！そこで行われる捜査って何だ。

2010年1月14日号(抜粋)

ハルマゲドンだな(苦笑)。

<小沢事務所を捜索／鹿島の本社・支店も／東京地検>

<http://www.asahi.com/national/update/0113/TKY201001130315.html>

(中略)

検察は落し所をどこだと考えているのか。更に言うと、こうした動きは政治的には極めて影響力を持つが、終わってみて「何もありませんでした」で検察が責任をとったことはない。

昨日、メッセンジャーの黒田君のところでも示唆したが、司法当局がひっかきまわしてあちこちに多大な影響を残したあと「このくらいでカンベンしたるわ」と引き上げてそれだけでいいのか。その間、なんとか国を立て直そうとしている政府への政治的な影響を考えると国民としては損害賠償を請求したいほどである。

もちろんこれは大山鳴動して鼠一匹ということ想定しての話だが、小沢一郎幹事長は当然そうなるということ想定して動いている。またこんなことを書くと小沢をかばうとか批判されるのだろうが、小沢さんを識る人というのはあまりいないので、まあそういう珍しい人間の分析として聞いておいて下さい。酒席でのネタになるし(笑)悪口を言う時に使ってもいいから。ちなみに、支那への態度や外国人参政権の問題などでは、私はきちんと反旗を翻していますからね(笑)。

小沢さんほど政治資金規正法を熟知している人はいない。小沢一郎というひとは自民党の金権政治と法律が結婚して生まれたような政治家である。それがいいか悪いかは別にして、法そのものの成り立ちを熟知していて、決して法律の網にかかるようなことはしない。だから私は、今回のやりとりはむしろ小沢さんが仕掛けたトラップに検察がまんまと乗っているのではないかとすら思う。柔道で言うと支えつり込み足でしょうか。

事態を複雑にしているのは、検察は司法捜査権を持っている権力の行使者であり、小沢さんはいち政党の幹事長という、法的には何の力も持っていない人物であることだ。その小沢さんの方を大マスコミは日本一の実力者と書く。しかし、では私たち有権者が小沢さんを問いただそうとしても、公職にないのだからどうしようもない。だから大マスコミは「説明責任」という不思議な言葉を使ってなんとか小沢さんを公的な場所に引き出そうとする。

しかし出てくるか来ないかという切り札は彼の方が持っている。この矛盾というかメディア側の無理難題がずっと続いていて、それを拒否すると「傲慢だ」と書き立てているのである。小沢さんの政治的スタンスは別にして、このことについてはどうですか。かなり無理筋ではないですかね？私はこういう「リンチ」が行われているということは「法の恣意的運用」ということで極めて憂うべきことだと思う。

ハルマゲドンの戦線はひとつだけではない。多方面で闘いが行われているのだが、大マスコ

ミは正面の戦争を見せてカネにすることに熱心でこっちはベタ記事だ。

<2政治団体「ダミーと思わず」西松元幹部が証言>

<http://www.yomiuri.co.jp/national/news/20100113-OYT1T01250.htm>

<準大手ゼネコン「西松建設」から小沢一郎・民主党幹事長の資金管理団体「陸山会」などへの違法献金事件で、政治資金規正法違反(虚偽記入など)に問われた小沢氏の公設第1秘書で同会の元会計責任者・大久保隆規被告(48)の第2回公判は13日午後も、岡崎彰文・元同社取締役総務部長(68)の証人尋問が行われた。

岡崎元部長は、同社OBを代表とした二つの政治団体について、「西松建設のダミーだとは思っていなかった」と証言した。>

ちょっと待てよ。検察の描いた絵を根底から覆す証言を、検察側の証人がしたわけだ。政権交代の前に連日一面で検察側のリークを書き立てていた大マスコミは、これも同じように一面で扱わなきゃいけないでしょうが。こうなってくると、今回のガサ入れもひょっとしてこの公判の日程にあわせてやったのではないかとまで思われてくる。

一面は「小沢関係各所にガサ入れ」。これなら西松建設事件を根底からひっくり返すような記事が一面にならなくなるわな。検察としては、御用談合記者クラブの連中には「あれ、頼むな」と耳打ちしておけばいいんだからね。

ふざけるな、である。

しつこいほど繰り返すが、私は新政権は戦闘能力の点では旧政権よりも高いが、思想信条の歪み方についてはきわめて危惧するものである。また、小沢さんに関して、もし旧態依然の政治資金に関する不正があるのならば、それは糾されねばならないと考える。

しかし、だからといって、一連のこの検察のやり方を許しては日本人としての法に対する義が立たないと思うのだ。いったい検察の動機は何なのか。今に始まった事ではない。旧政権の時もある時期から、検察はきわめて政治的な動きをして「存在感」を示してきた。

私はこれは「官」と「新しい政」のとてつもない厳しいハルマゲドンだと思うのである。検察も結局は「官」であったということだ。「官」という、私たちが育ててしまった化け物が手にしているもっとも大きな武器は司法権である。それを使って最後の反撃をして来ているとしか思えない。司法を司る「官」はあくまでも公平であり中立であるという、良平常民の考え方を悪用されているとすら思う。それに悪のりして下々の司法権を持つ「官」がさまざまな場面で法の恣意的を運用をしはじめてはいないか。黒田君や、少し前では草薙剛さんの例を持ち出すまでもなく。

そして、私たちの直近の悲劇としては、大マスコミがまんまと飼い馴らされていて、これに対して疑義を呈さないことである。

